

日本におけるダンススポーツ・ブレイキンの現状と展望

スポーツマネジメントゼミナール 1316001 青木羽唯

1. 研究動機・研究目的

2017年よりIOCは、若者向きで、より都市型で、より女性を取り入れるよう大きく変革を遂げている。実際に2020東京オリンピック競技大会では新たに、スケートボード、BMXフリースタイル、サーフィン、スポーツクライミング、3人制バスケットボールが追加種目として決定した。また、2024年のパリオリンピックでは、スケートボードやスポーツクライミング、サーフィンのほか、ブレイクダンスが暫定追加種目として選ばれている。

ブレイクダンスは従来、スポーツとして扱われたことはなく、勝敗をつける文化はあるものの、本来自己表現の一つとして発展を遂げてきた。ブレイクダンスが競技となった経緯は、全く関係のない他の団体が申請し、2018年のブエノスアイレスユースオリンピックの種目となったことから始まる。そのため、ブレイキンのルール自体も、スポーツ連盟もユースオリンピックに向け即席で作られたものであった。日本は世界トップレベルの実力を持っているため、オリンピックの際には注目度はかなり上がることが予想される。その上で、上記のように作られたブレイキンの統括団体のマネジメント体制に疑問を感じたため、本研究に着手することとした。

本研究の目的は、日本ダンススポーツ連盟のマネジメント体制について現状を調査し、今後のブレイキンの発展に向けての方策を立てることであった。

2. 研究方法

日本ダンススポーツ連盟(JDSF)と世界ダンススポーツ連盟(WDSF)の公式ホームページと事業計画、事業報告書、公式SNS、主催のイベント、JDSFブレイクダンス部部长を務めるKATSU1氏のインタビュー記事を参照し文献研究を行った。まず、ブレイクダンスの生い立ちと発展、本来持っているそのカルチャーについて調査した。その結果を踏まえ、競技として扱われるようになるまでの流れ、現在の状況について調査し、今後の発展とパリオリンピックに向けての課題を考察した。

3. 主な結果と考察

ブレイキンのスポーツ連盟は、日本ダンススポーツ連盟(JDSF)の内部組織であるJDSFブレイクダンス部として存在している。JDSFは一般的に社交ダンスと呼ばれる競技ダンスを主に扱っていた組織であり、そのJDSFが社交ダンスをオリンピックの追加種目に申請する際、たまたまブレイキンを一緒に申請したところ、ブレイキンだけが認可されたというのが実態である。ブエノスアイレスユースオリンピックでは、女子は金メダル、男子は銅メダルを獲得し日本の強さを示した。

その後の現状としては、JDSF主催の大会は一度開催されているものの、競技の発展やパリオリンピックに向けて大きく動いている様子は見られなかった。ルールもまだかなり複

雑で、だれが見ても明確でクリアであるとは言い切れない。同じ連盟内の社交ダンスについては十分なサポートとマネジメント体制が敷かれており、比較すると大きな差があることがわかる。違うとらえ方をすれば、ブレイキンのマネジメントもそのレベルまで発展させることが現時点で可能であるということである。

以上の現状課題を踏まえ、今後行われるべき方策として、1) スポーツとしての体制整備、2) 組織体制の強化、3) プロモーション活動の強化の3点が挙げられる。

1つ目については、今まで築かれてきたカルチャーとは別物としてスポーツのブレイキンを扱い、仕組みを固めていくことが一番理想的であると考えられる。そのためにも、採点方式をはじめとした競技ルールをさらに明瞭にして整備することが先決であると思われる。またその認知も低いため、整備したルールに沿って行う競技会を多く開くことも必要であると考えられる。

2つ目は、競技ダンスは既にマネジメント体制が整備されているため、それをモデルとしてブレイクダンス部門の体制を整え、JDSF 内で競技ダンスと同程度の扱いでサポートできるような組織体制の改革が必要である。

3つ目のプロモーションについては、オリンピックの結果は世間の注目度が高く、実力を持ち合わせた日本はさらに注目されることが予想される。広く認知を得てブレイキンが浸透していくためにも、今からプロモーション活動に力を入れていくことが必要である。

4. 結論

ギャング同士の殺し合いの代わりに行われることから広まっていったブレイクダンスは、世界で最も人口が多いダンスのジャンルにまで発展した。勝敗を決めるバトルが主流ではあったが、それは自己表現の方法として発達したものであり、スポーツとしては扱われてはいなかった。しかし突然 2018 年のブエノスアイレスユースオリンピックの種目となり、競技連盟が作られ、制度が整備されることとなった。そのため、競技としてまだ日が浅く、その体制やルールなどに関して未熟な部分が多く残っている。

スポーツとしての側面も持つようになったブレイキンは、2024 年のパリオリンピックの追加種目にも選定されることとなった。オリンピック競技になれば、世界レベルの実力を持つ日本はメダル獲得の可能性を大いに持っているため、メディアや世間の注目度は上がり、ブレイキンは更に発展する可能性を持つ。今後迎えるパリオリンピックのため、さらなるブレイキン発展のためにも競技体制や組織体制、プロモーション活動の拡充は必須である。しかし、WDSF や JDSF それに向けての動きは未だ大きく見られないのが現状であるため、今後の事業に期待したい。

5. 卒業論文の執筆を終えて

今回、ブレイキンのスポーツ連盟に焦点を当てて執筆を行った。一般的なスポーツとは異なり、特殊な種目であったため今回は他のスポーツ連盟と比較しなかったが、ストリートカルチャーから生まれた他のスポーツ、他のエクストリームスポーツ、ビッグスポーツのスポーツ連盟などと分けて比較するとまた異なる考察が得られたように思う。また今後、パリオリンピックについての動向がみられると思うので、注目していきたい。